

作文は好きですか
～ 自己表現に関する大切な事 ～

つき中の2学期には弁論大会があります。私も、そこで皆さんの作文をたくさん聴かせてもらっています。作文のテーマによっては、家族に気を遣っている生徒たちの姿を垣間見ることも出来ます。今日はその辺りから話をつないで行こうとおもいます

さて、皆さん。今日は「家の中のお話し」であるので、そのイメージで聴いてくれるといいとおもいます。

例えば自分が長男で小さい弟や妹がいるという時に、お兄ちゃんだけど親に甘えたい気持ちってあると思うんです。でもその気持ちはちょっとしか書かれていない。それ以外は両親への感謝や、両親は弟や妹の世話で忙しいということを僕はよくわかっているよ、と書いたりする。

沢山の作文を通じて、その子の気持ちを理解することを続けていけば、甘えたいと思っている気持ちがわかる。でもそうでないと「この子はお父さんお母さんのことをよく見て、えらいな」と読んでしまうかもしれない。

さて、今から皆さんにお話しする中には、6年生のアカネさんという関西の女の子が出てきます。アカネさんは不登校ですが、学校に日記を届けたりしています。

最初は誰が読んでも楽しめるような内容ばかり書いているのですが、ちょっとずつ、1人で家で過ごす時間のことを書くようになります。

しばらくして、彼女が一人で学校に来たのですが、その後、クラスの子が「アカネちゃんが教室に来て、みんながすごい盛り上がった。楽しい1日だった」という作文を書くんです。

その後、彼女は日記を書きました。「家にずっとこもっていると、(あーあ、つまらんなー)とか思う。みんなにこれを言えば、『学校くればいいや〜ん。』とか言われる。みんなは、そう言うけどそんな簡単じゃない。」と日記に綴りました。

さて、アカネちゃんのこの日記のことで考えてみたいことは、みんなが自分のことを歓迎してくれてるって思えたからこそ、書けた本音だということです。

もし、まだ、彼女自身が気遣いの世界に生きてたら、「これからも頑張って来るね」って書いていたんじゃないでしょうか。

みんなが学校に来られない自分を責めるのではなく、「楽しいからおいでよ」って言ってくれる中で初めて、「そんなに簡単じゃない」という自分自身の気持ちを見つめられるということです。

文章がうまい下手とかじゃなくて、自分が丁寧に表現したことが受け止められていく、共感的に読まれていく中で、普通だったら書きにくいことも書けるようになって行くんだなということです。

でも、書きたくない子もいるはずです。そういう子は、書きたくなるような経験、心が動くような経験をすることも大事なのですが、まずは何を書いても大丈夫、と思えることが大事ということです。

今日は作文の話を通して、皆さんの身近にいる仲間とどのように関わるか考えてもらいたかったのでこの話しをしました。